



懇談会では大柏院長（手前左）らが参加者の質問に答えた

## 浦河日赤の現状 住民と危機感共有

# 医師確保網渡り状態 黒字化満床でも困難

【浦河】日高管内の基幹病院である浦河赤十字病院の現状を知り、住民の立場から支援しようという地域懇談会が、町総合文化会館で開かれた。病院側から、医師や看護師確保の難しさ、厳しい経営について説明があり、参加者約50人が危機感を共有するとともに支援の方策を考えた。

### 応援する会が懇談会

「浦河赤十字病院を応援する会」（土井忠男会長）の主催で、9日に行った。病院側から大柏秀樹院長、小松比左志事務部長らが出席して、医師確保、看護師確保、経営の各状況について説明した。

医師確保では「内科医の減少が最大の問題」とした。本年度は外来診療の受付時間を短縮したが、全国からの医師派遣

経営状況では、本業の

収支は毎年数億円の赤字で、ここ数年は国のコロナ補助金で総収支の黒字を確保したと説明。「補助金廃止で本年度から経営が厳しくなる」との見通しとともに、「高度医療ができないため、満床になっても黒字化は難しい」と、構造的問題であることも報告した。

参加者からは「住民の応援は具体的に何をすればいいのか」「医師の偏在は国の政策の問題で、地方から訴えていかねば」といった声が出た。これに対し、病院側は「行政の支援がないと運営していくことができない」と危機感を表明。浦河町や北海道に支援を求める働きかけが必要とした。

「応援する会」副会長の八十八川武明うらかわエマオ診療所院長は、医師の立場から「派遣医がよく代わるのが嫌だと言っのでなく、来てくれてありがたいと感謝を伝えることで医師側の印象も変わる」と述べた。

大柏院長は今後について「病院としてできるのは教育の充実。（医師に）地域医療を担う総合診療の教育を進めていければ、出て行く人を減らせる」と述べた上で「医師、看護師、患者から選ばれた病院を目指したい」と表明した。

小松事務部長は「看護師の離職理由の4割は都会志向。若い人が残る方策を町にも考えてほしいし、ヒントがあるなら教えてほしい」と解決策への協力を求めた。

懇談会終了後、八十八川副会長は「病院側が本音を話してくれ、一緒に考えるスタートラインに立てた」と振り返った。（加藤敦）